

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：25406

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660098

研究課題名(和文) 社会参加を希望する在宅頸髄損傷者のセルフマネジメント能力の理論化

研究課題名(英文) Self-management among home-based individuals with cervical spinal cord participating in community activities

研究代表者

岡田 麻里 (Okada, Mari)

県立広島大学・保健福祉学部・講師

研究者番号：90534800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、社会参加を目指す在宅頸髄損傷者のセルフマネジメントを明らかにすることである。当事者グループに所属する在宅頸髄損傷者9名に半構造的面接調査を行い、その内容を木下が提唱する修正版グラウンテッドセオリーアプローチを活用して、質的に分析をした。その結果、障害をもちながら自律して生きる基本を学ぶ、頸髄損傷の身体を健康に保つ生活の確立、自分に役立つ情報収集能力、ケア関係構築能力地域の一人として自分らしくあるなどのカテゴリーが抽出された。在宅頸髄損傷者のセルフマネジメントとは、自分の身体と折り合いをつけながら自分の生き方を再構築するプロセスであることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The objective of the present study was to examine the self-management ability of home-based individuals with CSCl and to understand how they made their lives meaningful. A qualitative design was used. Semi-structured home interviews were conducted with 9 participants, all of whom belonged to the Self Help Group for CSCl in one prefecture and assumed the leading role there. The following categories were extracted: being self-sufficient, having a regular lifestyle to preserve one's health following CSCl, getting useful information, getting a caring relationship with others, rediscovering personal goals and challenges in life, being active members of the community, etc. Self-management among individuals with CSCl revolves around the process of rebuilding one's life and maintaining the health gained.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：頸髄損傷 社会参加 セルフマネジメント 在宅

## 1. 研究開始当初の背景

日本における脊髄損傷疫学調査(1992)によれば、わが国には脊髄損傷者は10万人以上おり、毎年5千人の新たな受傷者がいるといわれている。近年は、脊髄損傷者の若年化と高齢化の二極化と、障害の重度化が問題になっているといわれている。これらの問題は本人のみならず、家族にとっての影響も深刻である。

また、頸髄損傷者の在宅復帰や社会復帰のプロセスにおいては、未開拓な部分が多いと言われている(陳, 2010)。橋本(2008)は、社会と接点をもてない閉鎖的環境は頸髄損傷者から力を奪い社会参加を遅らせる可能性が高いことを強調し、医療・福祉・地域が連携し、ピアサポートの支援を含めたトータルのケア提供の環境設備の必要性を指摘している。

重度な障害をもちながらも地域で暮らし、社会参加を実現できる地域の在り方を示し、トータルケアの提供について、具体的に実現可能な形で示すことは緊急の課題である。そのため、頸髄損傷者らが自ら望む在宅生活をどのように実現し維持継続していくのかを、理論化していくことは重要である。

## 2. 研究の目的

社会参加を目指す在宅頸髄損傷者が、どのように在宅生活を実現し、維持継続しているのか、在宅頸髄損傷者のセルフマネジメントを明らかにし理論化することを目的とした。

## 3. 研究の方法

上記の目標を達成するために、以下のように研究を進めた。

(1)2000~2013年までの日本医学中央雑誌データベースから「セルフマネジメント/セルフケア」、「頸髄損傷」、「看護」等で掛け合わせ、テーマに関連する論文60件をRodgersのアプローチを用いて、在宅頸髄損傷者のセルフマネジメントの概念分析を行った。

(2)当事者の視点から在宅頸髄損傷者のセルフマネジメントを明らかにするために、面接調査を実施した。

研究デザインは木下の提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用することとした。

研究参加者は、H県頸髄損傷者の会に依頼し、スノウボウル式に紹介を得た。研究参加者の選定基準は、在宅で生活している頸髄損傷者であり自ら社会参加していると自覚している者とした。電話で研究テーマと趣旨を説明したうえで、研究協力依頼を行い了解が得られてから、研究書類を送付し、面接日時を決めた。

データ収集法は半構造的面接法とした。面接内容は「受傷してから現在に至るまでの生活について」「現在の生活を実現させるためにどのような努力をしているか」「在宅生活

を始めて困ったことやその対処について」「自分にとっての社会参加」「社会参加するために努力していること」等を自由に語ってもらった。

本研究はデータ収集と分析を同時に行う理論的サンプリングを採用した。継続的比較分析を行いながら、概念を抽出し、類似するものをまとめカテゴリーを生成した。カテゴリーが浮上すると、カテゴリー間の関係性を検討し、理論生成を目指した。理論的飽和に達したと判断した9名で面接を終了した。

倫理的配慮は所属大学の倫理審査委員会から承認を得た。

## 4. 研究成果

### (1)頸髄損傷者のセルフマネジメント概念分析

頸髄損傷者がセルフマネジメントを必要とする背景：先行要因

先行要因は、【脊髄損傷者特有の障害/合併症による困難】、【障害をもつ人々を取り巻く社会環境の進歩と限界の混在】の2つのカテゴリーから構成された。

頸髄損傷者のセルフマネジメントを構成する要素：属性

属性は、【自己に対する自信の回復】、【医学的知識と経験/工夫に基づく合併症予防生活スキルの獲得】、【閉鎖的環境を打開し社会とつながるためのネットワーク創り】、【介護者の介護技術の獲得】、【障害を抱えた本人/家族が現実に向き合う支援】、【在宅生活を基盤とした自律を促す患者/家族教育】、【多職種チームによる在宅生活の支援体制構築】の7つのカテゴリーから構成された。

前者4つは本人自身と家族のセルフマネジメントであり、後者3つは専門職らによる支援である。

頸髄損傷者のセルフマネジメントの成果：帰結

帰結は、【障害を抱えながらも希望をもって地域で暮らすことの実現】、【障害者とともに暮らす家族としてのQOLの向上】の2カテゴリーから構成された。

### 考察

概念分析の結果、頸髄損傷者のセルフマネジメントとは、専門職との関わりによって高められていくものであり、自己に対する自信の回復を基盤とし、入院やリハビリテーション等で学んだ医学的知識と経験/工夫に基づいて合併症を予防するための生活スキルと自分の生活を自分で管理調整する力を獲得し、自ら社会とつながっていくためのネットワーク創りができることと定義された。

### (2)社会参加を希望する在宅頸髄損傷者のセルフマネジメント能力の理論化

研究参加者らは、頸髄損傷を負うという過酷な体験をしながらもリハビリテーションや看護ケアを通して【障害をもちながらも自

律して生きる基本を学び、自宅退院を目指した。退院後は介護者やサービス利用をしながら【頸髄損傷の身体を健康に保つための生活の確立】する中で、試行錯誤期、閉鎖的充電期、安定期を経ていた。【頸髄損傷の身体を健康に保つための生活の確立】するためには、【仲間と出会い次のステップに踏み出すきっかけをつかむ】、【家族と互いに自律したいいい距離感を保つ】、【自分に必要な情報収集能力】、【ケア関係構築力】が必要となった。【頸髄損傷の身体を健康に保つための生活の確立】を実現することで、【地域の一員として自分らしくある】、【頸髄損傷者に対する理解を広げる活動】といった社会参加活動が可能となった。

一方、研究参加者らにとって【地域の一員として自分らしくある】、【頸髄損傷者に対する理解を広げる活動】の実現は、【頸髄損傷の身体を健康に保つための生活の確立】が前提であり、そのために【自分に必要な情報収集能力】、【ケア関係構築力】を発揮していた。

これらは、社会参加を目指す在宅頸髄損傷者のセルフマネジメント能力であり、頸髄損傷者としての自分の生き方を再構築するために身体を健康に保つ生活を確立するプロセスである。

### (3)考察

当事者の視点から明らかにされた在宅頸髄損傷者のセルフマネジメントは、【頸髄損傷の身体を健康に保つための生活の確立】するために、【仲間と出会い次のステップに踏み出すきっかけをつかむ】、【家族と互いに自律したいいい距離感を保つ】、【自分に必要な情報収集能力】、【ケア関係構築力】が関わっていたことが分かった。そのため、医療専門職が指導的に関わるだけでなく患者会やピアの関係を活用すること、家族に介護技術を指導することによって依存関係にならない配慮、インターネットやパソコン、電話などの通信機器を整えることによって自由に情報収集できる手段を得ること、他者への援助の求め方など他者とケア関係を創るための継続的な支援が必要であると考えられた。

### (4)今後の課題

障害を取り巻く環境は時代と共に大きく変化している。頸髄損傷者は、専門職や社会資源を積極的に活用し、自らのセルフマネジメントを高めることによって、重度の障害を抱えていても閉鎖的な環境を打開し、希望をもって【地域の一員として自分らしくある】ことが可能であると分かった。

今後の課題は、構築された理論が、頸髄損傷者を継続的に支援するために活用可能性を検証していくことである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

新谷祥子, 岡田麻里, 今井多樹子, 西田征治: 頸髄損傷者が一人暮らしをするために起こした行動と獲得した援助. 日本看護研究学会第39回学術集会, 2013年8月23日, 秋田県秋田市

Mari Okada, Hiroko Nagae, Shizuko Tanigaki: Concept analysis of self-management among individuals with cervical spinal cord injury The 16th EAFONS 2013年2月21日, タイ・バンコク

岡田麻里, 長江弘子, 谷垣静子: 在宅頸髄損傷者のセルフマネジメント能力に関する概念分析. 第15回日本地域看護学会学術集会, 2012年6月24日, 東京都中央区

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

岡田麻里 (OKADA MARI)  
県立広島大学・保健福祉学部・講師

研究者番号：90534800

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

長江弘子 (NAGAE HIROKO)

千葉大学大学院・看護学研究科・特任教授

研究者番号：102665770

谷垣静子 (TANIGAKI SHIZUKA)

岡山大学大学院・保健学研究科・教授

研究者番号：80263143

(4)研究協力者

新谷祥子 (SHINTANI SYOKO)

広島西医療センター